

DoIT 2022年度 慶応大学 文学部 解答速報

慶応大学 文学部

小論文

即日ポイント解説



DoIT 2022年度 慶応文学部 即日ポイント解説

課題文出典

入試情報

荒谷 大輔

『使える哲学—私たちを駆り立てる五つの欲望はどこから来たのか—』
講談社選書メチエ

著者について

東京大学大学院倫理学科博士課程単位取得退学。文学博士。哲学・倫理学。

本文キーワード：「正しさ」／「正義」／リベラリズム／
公共性／近代社会／「自由」／「平等」／
「権利」／資本主義社会

DoIT 2022年度 慶応文学部 即日ポイント解説

設問 | 要約部 ▶ 300～360字

Q(近代)社会における「正しさ」(正義)とは何か

リベラル派1 「ユルゲン・ハーバーマス」
→筆者の意見

リベラル派2 「ジョン・ロールズ」
→筆者の意見

設問 | 要約部

リベラル派1 「ユルゲン・ハーバーマース」の主張

現在の資本主義的な「正しさ」の設定に対し、
かつての公共的な「正しさ」を復活させるべきだ。

[かつて]公共的な議論の場において合意に基づき「正しさ」が決定

[現在]資本主義社会における公共性は消費を通じて形成される

(市場原理できまる資本主義的な「正しさ」)[1～7段落]

→皆が理性的な存在として振舞えば、
合理的に「正しい」結論を共有できる。

[9段落]

設問 | 要約部

リベラル派1に対する筆者の主張①

皆が「理性的存在者」であることは、生得的ではなく、
特定の理念にコミットしてはじめて成立。

= リベラル派の正義は、
理念の上でのみ「正しい」ことを、
皆に強制するという
構造的な困難を抱えている。

[9段落]

設問 | 要約部

リベラル派1に対する筆者の主張②

かつて存在した「公共性」は、

資本主義を実現するための「革命」を実現した

(=資本主義的な公共性を目指した)[11段落]

→市民が熟議によって物事をきめるというかたちでの

「民主主義」は、いまだかつて存在した

ことはない(理想に過ぎない)[12段落]

設問 | 要約部

リベラル派2 「ジョン・ロールズ」の主張

社会契約論の原点に立ち返り、「正義」とは何かを考えた。

人間は、自分の社会的な条件を知らない「原初状態」においては、
誰もが不平等や格差のない社会を望む[15～16段落]

よって、「自由」と「平等」の原理が、
だれもが普遍的な正義の原理となる[17段落]

→社会的なマイノリティに配慮し、
不平等是正のための政策が
優先されるべき

DoIT 2022年度 慶応文学部 即日ポイント解説

設問 | 要約部

リベラル派1に対する筆者の主張

実際にそのような原初状態に置かれた覚えがない人に対して、

リベラルな理念へのコミットを要求する権利はあるのか。

= リベラル派の「正義」は、すべての人々のコミットを前提とした上で「正しさ」を要求する [20～21段落]

→ 近代社会の成立に不可欠な「自由」は「平等」の「権利」は、どのような意味で「正しい」(正義)と言えるのか。

[22段落]

設問Ⅱ意見部

近代社会における

「自由」や「平等」という「権利」の
「正しさ」(正義)も

みんなが「納得」(合意)したものなの？

ある意味で「正義」も

「強制」されてない？

設問Ⅱ意見部

アウトな解答(本文を踏まえてない) 「正しさ」について

- ・ 「自由」と「平等」に開かれた、
真に「正しい」社会を目指すべき。
- ・ 人は「正義」に生きるべきだ
- ・ すべての人が「正しい」と思えること大切
- ・ 闇雲なマイノリティ擁護／「多様性」の振りかざし

DoIT 2022年度 慶応文学部 即日ポイント解説

設問Ⅱ意見部

5 / 8 ページ

18段落に「マイノリティ／弱者」というキーワードが…

単純に、少数派擁護の立場をとると本文理解ができていないことに。

「弱者」へ過剰な救済が溝をつくることなる。

Cf：過度なアフターメーション・アクション(弱者救済)への批判

こうして「正義」の基準を明確にできれば、あらゆる政策は、この原理に照らして優先順位をつけられることになるでしょう。「正義」を実現するための政策が第一のものであり、そうでないものは後回しでいいということになります。社会的なマイノリティに配慮し、不平等を是正するための政策が、こうして「正義」を実現するために優先されるべきものと見なされることになりました。

公民権運動以後のアメリカでは、一九八〇年代にネオ・リベリズムが台頭するまで、こうした福祉政策の重視が現実の政治にも反映されました。高度経済成長期に実現した福祉政策は、しかし、経済の成長が鈍化するにつれて批判にさらされます。「弱者」ばかりが優遇される福祉政策は、個人人の自助努力の結果として得られた収入を不当に奪っていると考えられるようになったのです。そうした白人低中間層の「不満」は、リベリズムの立場からすれば、社会的マイノリティに対する想像力の欠如と見なされます。人がみな同じ「原初状態」におかれていると仮定してみれば「運良く」健康的な生活を送れている人でも社会的弱者になる可能性があったはずで、運の良い人が悪かった人の肩代わりをするのは、誰もが安心して暮らせる社会を設計するには必要なことだと考えられたのです。

こうした理念は、それにコミットした覚えがない人々にも強要できるものでしょうか。想定されるような「原初状態」におかれたら、人はみな同じ判断をするはずだというロールズの主張が仮に正しかったとして、実際にそのような原初状態におかれた覚えがない人に対して、リベラルな理念へのコミットを要求することはどのような権利で可能になるのでしょうか。経済的に追い詰められていく低中間層の人々は、不当なコミットメントの前提が「弱者」に過剰な救済を与えていると考えます。そうした考え方は「正しくない」と言ったとしても、彼らとの間の溝は深まるばかりです。

設問II意見部

理解を示した解答

- すべての人々が「正しさ」(正義)について合意を得ることの難しさについて言及
 - しばしば「正義」は、一部の「理性的」(とされる)人々からの押し付けになっているのでは？
- ポピュリズムや過度なアファメーションアクションへの言及
- ハンナ・アーレントの「人間の条件」
 - 異なる他者への想像力と連帯について